

## シャーウッド・アンダソンの女性像

播磨谷 一 雄

A Study of Sherwood Anderson's Women in his Works

Ichio HARIMAYA

(昭和49年10月31日受理)

## I

To the memory of my mother, Emma Smith Anderson, whose keen observations on the life about her first awoke in me the hunger to see beneath the surface of lives, this book is dedicated. (1)

Anderson は *Winesburg Ohio* の巻頭言に上述のように述べ彼の母の思い出に感謝の意を表している。この中で我々の注意を喚起するのは、彼の母の人生についての鋭い観察が彼に人生の表面下を観察したいという意欲を与えたと述べていることである。彼の母に関する叙述は自伝的作品といわれる *A Story Teller's Story*<sup>(2)</sup> や *Tar A Midwest Childhood*<sup>(3)</sup> や *Memoirs* にみられるばかりでなく *Windy McPherson's Son*<sup>(4)</sup> などの小説にも見られる。このように彼の前期から後期の作品に一貫してみられる彼の母は、彼にとってどのような存在であったかは我々に大きな興味を引き起すものである。

しかし彼が *Story* の中で語っているように、他の作中人物と同様に彼の母親像も必ずしも実像ではない<sup>(5)</sup>。Case of Western Reserve Univ. 版の Text につけられた客注によると、彼は母の出生についてさえあまり確信を持っていなかったように見える。彼は母について次のように述べている。

She had been a bound girl in farmer's family when she married father, the improvident young dandy. There was Italian blood in her veins and her origin was something of a mystery. Perhaps we never cared to solve it—wanted it to remain a mystery. It is so wonderfully comforting to think of one's mother as a dark beautiful and somewhat mysterious woman.<sup>(6)</sup>

上述の文の下線部の事実について、この Text の客注では完全に否定しているのである。彼にとって重要なのは母の出生とか、結婚前の職業の詳細ではなく、後半の

叙述にあるように mysterious な存在としての母親像であったように思われる。彼は少年時代を想起し、思い出につながるありし日の母の姿を、事実を起点として様々な彼独特の fancy で色付けしていったのである。

彼の母は飲酒癖と放浪癖にとりつかれた夫を持ち、七人の子供を養うために、洗濯女として働かなければならず、過労のため肺結核で亡くなったのは事実である。彼にとって母の生涯は苦しみと連続であり、忍耐の生涯のように思われたに相違ない。しかし母は夫や子供に対して不満を訴えることもなく、生命を賭して家庭を守った。そのような母の生き方が彼に女性のたくましさ、母性の偉大さに対する尊敬、畏怖の念を教えると同時に、彼の脳裏に深くとどまることになったのである。特にそれは彼が19才で母を失い、母の苦勞に何も報いることがなかったと後年になって考えた時、倍加され一種の負い目として彼にせまったように思われる。

*Story* の中で、彼は苦しい家計を支える母の姿や、子供達のひび割れた手に無言の愛情をもって油をすりこんでくれる母の姿など様々な母親像を感傷的な調子で語っている。それらの中で特に彼の印象に残るものは、母の死であったように思われ、それに関する叙述が彼の全作品の中で実に5度の多きにわたって見られることから明らかである。しかし注意すべきことは、彼の母親像は先述のように事実を起点としているが、あくまで彼の fancy の中のものであり、感傷的色彩が濃いということである。例えば母の死について *Story* では a rainy dismal day in the fall<sup>(7)</sup> としているが、実際の日付は May 10, 1895 なのである。この日付の相違は、彼の感傷が秋の暗い雨降りの日に一致した結果生じたものと思われ、母の死を美化し感傷的な事実としてとらえようとする彼の意図が明らかに認められる。

作品におけるこのような母の取り扱いについて、*Tar* において次のように語っている。

If you have a mother like Mary Moohead and she is likely to look at... and she dies when you

are young, what you do all your life afterwards is to use her as material for dreams. It is unfair to her but you do it. Very likely you make her sweeter than she was, kinder than she was, wiser than she was. What's the harm? (8)

ここで述べられているように、彼は思い出の中の母親像を神秘的なものとしてとらえ、そのようにとらえることによって母親像を美化し、母の苦しみを不滅のものにしようと試みたのである。彼の理想像といえる母親像は事実を起点としたが、fancy の領域において殆んど完全なものにまで成長する。

When she spoke her words were filled with strange wisdom (how sharply yet I remember certain comments of hers—on life—on your neighbors)—but often she commanded all of us by the strength of her silences. (9)

母親の理想像は彼の fancy の中で心ゆくまで構築されたが、それはまた母親の讚美であったともいえ、母の生前、7人兄弟の一人として母の愛を独占できなかった彼を十分に満足させるものであった。

以上のような彼の親母的傾向は、反面、父親に対する嫌悪として現れる。父親の放浪性や家庭を顧みない無責任な飲酒と、母親の7人の子供をかかえての苦勞と対比される時、その嫌悪感には更に強いものになった。彼の前期における作品において特にこの傾向がみられる。(後期においては彼自身を父親と同一の立場で考えることにより、父親の理解の境地に達している)それは *Winesburg Ohio* における George Willard の父親の彼に対する無理解の態度や、自伝的小説といわれる *Windy* において示され、特に後者において顕著である。*Windy* においては、息子の Sam が父親に殺意を抱き絞殺しようとする場面がある。この事件は後で父が意識を回復することにより未遂に終るが、Sam の父に対する強い憎悪を示すと同時に、作者 Anderson の少年期における父親に対する強い嫌悪感を表していると想像されるのである。

以上考察してきたように、Anderson は特に初期において、母親像を美化し不滅のものとするにより讚美し、また一方では父親を嫌悪し憎悪する Oedipus complex の傾向がみられると考えられる。このような親母性は彼の女性観形成に大きな影響を及ぼし、特異な女性像を形成させたように思われる。次に母親の生き方の彼の作品に及ぼした影響について検討していきたい。

Anderson にとって、母の生き方の理解は、引用 (1) にみられたように彼の文学の一つの大きなテーマであり、

人生探究の端緒を示すものであった。例えば、何故母は他人の汚れた衣服を洗濯しなければならないかという疑問は、何故彼の家は他と比較して貧しいかの疑問に通じ、彼の父の機械文明社会とは相容れない生活態度の理解に導いたのである。それはまた、彼の父のみならず、工業化の波が押し寄せたその当時の社会の一般的風潮の理解にもつながることであった。巧妙に時流に乗り大金持になる人、彼の父のように時流に乗れず困窮の生活を続ける poor white、機械文明に抑圧された不能者などの理解の源は母の生き方の理解によるものであった。

また、大家族の食物で常に苦勞していた母の姿は、彼に家庭の犠牲者としての女性の姿を印象づけたに相違ない。男は酒を飲み泥酔して眼るだけであるが、女は家計で苦勞し、自由のない屈従の毎日を送らなければならない。*Poor White* の Clara は彼女の母の人生を回想して、It was the life of a beast. (10) と考える。また、*Death in the Woods* で登場する、無頼の夫や息子や家畜に食物を与える老女に、そのような女性像を瞥見できるのである。Anderson は母の生き方の中に、自由を奪われ悲惨な生き方をする女性をみたように思われる。同様に経済的困窮に耐え抜き、健康を顧みず家族のためにつくす母は彼に力強い女性像を教えることになり、度々神秘的段階まで高められ、後述する作品の heroine の重要な特質となっている。

引用 (9) に示されているような母の理知的な面は、Anderson の知性的女性への憧憬を促すことになった。*Windy* において Sam が Sue と会う前に知り合いになる姉妹、Janet と Edith における Janet の選択において、その傾向は明確に認められる。Janet は不具であるが Sam にはない知性を持った女性として描かれ、Edith は肉体的に完全であるが知的には stupid な女性として描かれている。Sam は Edith を真の友として選択するのである。また、作品に登場する女教師達にも Anderson の知的女性への憧憬の面が見い出せる。*Windy* の Mary Underwood は母親なき後の Sam の精神的母親として存在し、彼に将来の指針を与えてくれるし、*The Teacher* の女教師、Kate Swift も George Willard にとって同様な役割を持っている。

Anderson のこのような傾向は、彼の主人公達が配偶者として求める女性の選択基準にも現れている。Sam が最後に求める Sue は a woman of brain (11) で工場主の娘であり、*Poor White* の Clara は大学教育を受け農場主の娘である。*Dark Laughter* の Aline も又、弁護士を父に持ち良家の出である。これらの場合において、主人公が配偶者として選択する女性がそれぞれ少くとも主人公よりも知的水準の高い女性であることは偶然では

いように思われる。

下宿屋の娘として登場する *Story* の *Nora* の場合を考察すれば、より明確になるように思われる。*Anderson* は *Nora* になぐさめられ、その胸で泣いたことに対して次のように述べている。

There was a suspicion that *Nora*,…… whom I had somewhat looked down upon as not being my equal, had suddenly become my superior. … Could it be this woman, this maker of beds in a cheap laborer's rooming house, had a better mind than my own? (3)

また、*Poor White* の *Hugh* と下宿屋の娘 *Rose McCoy* との関係においても両者は最後には結ばれず、*Rose* は *Hugh* と同等の女性として扱われていないように思われる。

以上のように母親の知的な面への *Anderson* の尊敬と憧憬は彼の女性観形成に影響を及ぼし、知的女性の選択という基準を彼に与えたように思われる。彼にとって母親は無視出来ない存在であり、彼は晩年にいたるまで母親に対する讚美の気持を捨てることなく、1942年に出された *Memoirs* においては、むしろそのイメージを更に鮮烈にしている。母親を若くして失ったという事実は、彼にとって一生涯忘れられないものであり、そのため母親を fancy の中で長く保ち続けることになったのである。

## II

*Anderson* の女性観は前述のように母親の強い影響を受け、Oedipus Complex 的な傾向がみられたが、次に *Poor White* の *Hugh* と *Clara* の関係を中心にして考察しその特徴を探りたい。

*Hugh* は poor white の息子であるが、New England 出身の *Sarah* に引き取られ、ピューリタニズム的労働観を教えこまれる。彼にとって *Sarah* は精神的母親であり、怠け癖の出る度毎に彼女の教を思い起し仕事に向う。彼の心に緊張を与えるのは *Sarah* の厳しい教えである。彼はミシッピ河西岸の泥土地帯のある町に育つが、彼にとってこの地方は、子供の頃の思い出と結びついて、母の愛情と同様の安らぎを与えてくれる土地である。これら母親的存在の *Sarah* やミシッピ河と別れるに及んで、彼の心は耐えようのない孤独感にとられ、母親の手を離れた子供の心理を想像させるのである。

彼は *Sarah* のいう right people と right place (4) を求めて放浪の旅に出るが、彼が希望している人との暖い

交わりはできない。ある農場で働いた時、農場の娘を好ましく思うが、彼の方からは話がができず、娘の恋人に激しい怒りと嫉妬を感じその農場を去る。また彼が発明家として名をなしてから下宿屋の娘 *Rose* との関係にも、人と人との暖かい交わりを欲しながらできないもどかしさを感じる。*Anderson* は *Hugh* と *Rose* との心理をたどりながら、その微妙なくい違いを述べ、*Hugh* の自己表現できない欲求不満の状態を強調する。作者は発明家として町に大きな変革をもたらした *Hugh* の機械文明に対する疑問と、彼を取り巻く機械文明社会がその欲求不満の原因であると主張しているように思われる。しかし *Hugh* が他の人間と特に女性に対して自己表現できない極端に憶病な態度は、機械文明社会の抑圧ばかりではなく、女性に対して持っている彼の屈折した心理に原因があるように思われる。

*Clara* との結婚式後、彼が窓辺で外の darkness を見つめる描写がくり返し述べられるが、その darkness は母から離れた幼児に似た心理状態、即ち性的不安で圧倒されそうになっている *Hugh* の心理を象徴しているように思われる。この後、彼は二階から下の屋根に飛び降りて逃げ出すのである。ここに我々は女性に対して極端な恐怖心を持つ *Hugh* の性的 grotesque 像をみることができる。

*Hugh* は *Clara* に彼が悩んでいる機械発明の問題についての苦しい心境を打ち明けたいと思うができず、次のように考える。

…… he began thinking of *Sarah Shepard*, who had been friendly and kind to him when he was a lad, and wished she were with him, or better yet that *Clara* would take the attitude toward him he had taken. Had *Clara* taken it into her head to scold as *Sarah Shepard* had done he would have been relieved. (4)

ここで注意すべきことは、彼が *Clara* に *Sarah* に代る母親の役を期待し、*Sarah* がかってしたように *Clara* が彼を叱って欲しいと願っていることである。彼は妻の *Clara* に強い母性を欲し、それにより彼の苦悩が救済されることを望んでいるのである。それはまた母に対する幼児の甘えの態度に似たものである。

For the moment he wanted to be a boy and put his head on the shoulder of the women. (4)

しかし、*Clara* が彼を町を変革した hero として考え彼に男らしい bravery を期待している間は、彼らには真のつながりは生まれなかった。*Hugh* が暴徒に暴行を受

け、地面に殴り倒された時初めて、彼の英雄像が破壊され、彼女の子供として受容する態度が生まれ真のつながりが成立するのである。Clara における母性の誕生について次のように述べている。

Within her arose the mother, fierce, indomitable, strong with the strength of the roots of a tree. To her then and forever after Hugh was no hero, remaking the world, but a perplexed boy hurt by life. He never again escaped out of his boyhood in her consciousness of him. (6)

彼らの愛は男女対等のいわば大人の愛ではなく、母親が子供に対する愛であり、妻の側の意識の転換により成立し、夫は一方的に与えられる側であり、妻の母性的愛を甘受する点に特徴がある。Hugh は Oedipus Complex を持つ精神病者のように考えられる。Anderson は Hugh のように grotesque で不能な人間は機械文明社会の抑圧の結果生じたと主張しているにもかかわらず、我々は Hugh の性的恐怖、不安は作者の母に対する屈折した心理から生じていると考えざるを得ないのである。

Hugh と同様な性的不安を感じる主人公は他の作品においても見られる。例えば *Marching Men* の McGrigar の極端な女性ぎらい、*Dark Laughter* における Bruce の Bernice との結婚生活などである。Howe は Anderson のこのような傾向について次のように述べている。

…… though one must be extremely cautious in taking imaginative works as evidence about an author's life, it seems reasonably clear that for the man who wrote these novels sex was a source of deep anxiety. (7)

Howe の述べるように、想像上の作品から作家の私生活を云々するのは慎重を要することであるが、Sex は Anderson にとって大きな不安の源であったと考えられるのである。

*Windy* においては、もう一つの特徴である妻の母性の問題が現われているように思われる。Sam は母性を求め憧慕する者として描かれている。彼の妻の Sue は三度に及ぶ死産が示すように母性を欠いた女性である。Sam は彼女から母性を期待することができない。彼は放浪の旅の途中で三人の子供の母である酒場の踊子にたくましい母性を感じ、その子供達を引き取り帰還する。妻の Sue はその子供達により強い母性がめざめるのである。彼女の母性により救われるのは子供だけではなく、Sam も又、3年の放浪生活の後で暖く迎えらるることにより救

われるのである。その意味では Sam もまた子供の一人として Sue の母性を甘受しているのである。

次に *Dark Laughter* における Aline を中心とした愛の問題について検討を進めたい。Aline と Fred はパリで知り合うが、彼ら二人を結びつけたものはまわしい戦争体験で悩む Fred に対する Aline の同情である。彼女には彼が a man hurt, befouled (8) のように思われその夜、急激に高められた彼に対する母性的愛情から彼の求婚を受け入れるのである。

He was like a child, wanting something she stood for—to him wanting it desperately. (9)

しかし、結婚後の彼らの生活には愛情がみられず、Fred は事業に熱中し Aline には冷淡である。二人の間には心理的障壁が存在し、パリで求婚された晩をのぞいては彼らの間のその壁は除去されることはない。

注意すべきことは、*Windy* や *Poor White* において、Anderson は男性に対して女性の側から母性的愛情を与える愛の姿を述べたが、この作品においては、男女対等の自然の愛の姿を強調していることである。Fred と Aline の関係について次のように述べている。

There was no doubt that, since she had married him, Aline had often been rather irritated and bored by Fred, by his childishness, his obtuseness. (10)

Aline が彼女の愛を育ててくれることのない Fred の幼児性に対して不満を感じているのは、上述の文より明らかであるが、彼の求めている Aline 像はあくまでも母性的妻であることに留意すべきである。Aline に去られた Fred の心境は母に去られた幼児の心理に似ている。

Aline had been like a mother to him. When he was discouraged or upset she was someone to talk to. Lately she had been more and more like a mother. Could a mother so desert a child? (11)

彼は Aline が子供としての彼を見捨てるとは考えられず、戻るのではないかと期待するが、彼女は彼のもとを去る。ここで述べられている Fred と Aline の夫婦像は前述の Sam と Sue, Hugh と Clara にみられるものと同じ範疇に属さないように思われる。夫としての Fred の性格は Sam や Hugh の場合と類似性が認められるが妻としての Aline の描写において相違が見られる。Aline のは母性を期待する Fred は彼女により拒絶されるのである。作者は陳外された夫を受容する妻の立場に視点を置き、母性のみを期待する夫を妻に拒絶させるこ

とによって、男女対等の自然な愛の姿を描こうとしたといえる。しかし、Bruce と Aline の結びつきが、作者が意図したように果して自然な男女関係であったかどうかについては若干の疑問が残るのである。

彼らをつなげたものは、Aline があって愛した男性に Bruce が似ていたという単なる類似にすぎず、そこに安易さが感じとれる。また、彼らの関係は、Laurence の *Lady Chatterley's Lover* の場合のように女主人と庭師であるが、Bruce に庭師としての生活経験がなく生活の具体性を欠く設定である。また、彼らの置かれている社会関係にも言及されず、従って Fred を加えた三者の間の愛の葛藤などはあり得ないのである。それ故に彼らの愛の姿は、意識のみが先行した抽象的なものにならざるを得なかったのである。Trilling は Anderson のこのような傾向について次のように述べている。

... just as there is no real sensory<sup>1</sup> experience in Anderson's writing, there is also no real social experience. ... In his desire for better social relationships Anderson could never quite see the social relationships that do in fact exist, however inadequate they may be. ㉒

Bruce が Aline と新生活にふみ出そうとする時の彼の心が次のように語られている。

He had wanted to find the right woman, a woman he could really marry, but that was only half of it. He wanted to find the right kind of work too. ㉓

Bruce が Aline を得たのは正に half of it であり、残りの半分の the right kind of work の探究が後に残るのである。しかしこの探究は Anderson の憧れる一種の原始主義といえる自分自身の手で物を作り出す仕事を見出さない限り、困難であるように思われる。現代ではこのような仕事を発見することは困難であり、彼も認められているように機械から逃げることはできないのである。

I will admit that we cannot get away from the machine. ㉔

Bruce と Aline が十全な愛を達成するためには、作者が後の問題に残した right work が必要であり、更にそれにつれて起る社会的関係や、上述のような男女間の愛の葛藤が不可欠のように思われる。このような実生活的側面を伴わない Bruce, Aline 夫婦はやがて崩壊の危険にさらされることになり、Sam, Hugh, Fred のように女性からの一方的愛を期待する以外に、彼らの救済はなくなるのである。その意味において、Anderson は

*Dark Laughter* においても対等の男女関係を描ききれなかったように思われる。

以上三作品を中心に、Hugh と Clara, Sam と Sue, Fred と Aline, Bruce と Aline の4組の夫婦像を検当し、それぞれにおいてみられた女性観の特徴を考察してきたが、共通に認められるものとして、夫が妻の母性に依存することにより救済されるという点が上げられる。これは作者 Anderson の女性の母性に対する憧憬を示すと同時に、彼が晩年にいたるまで母の影響から遠ざかることのできなかつたことを示している。

### III

前述の各章において、Anderson の母親に対するイメージとそれが影響したと思われる作品に現れた夫婦像から女性観の特異性を描出してきたが、最後に *Perhaps Women* より彼の女性観を探りたい。

この作品は晩年における彼の社会主義的関心を表すものとして知られている。そこで取り扱われているのは、機械文明社会において機械に支配され疎外されつつある男性とそれを救済する者としての女性である。彼は現代社会における男性について次のように危機感を述べている。

In America there is an obvious danger. It is that presently man, having stayed for so long a time outside of his own male world, will lose forever the sense of it. I, myself, feel this danger constantly in the presence of modern industry. ㉕

彼の機械文明社会に対する危機感が高められ、織物工場の暗がりで会った夜警の grotesque な姿に現代人の宿命を見る。しかし、彼は引用㉕のように、現代人は機械から逃避することができないと認めざるを得ない。

このような社会において生活する現代人を救うには、できるだけ機械に触れる機会を少くして自然に戻るしかないと考えている。

It may sound childish, but men will have to go back to nature more. They will have to go to the fields and rivers. There will have to be a new religion, more pagan, something more closely connected with fields and rivers. ㉖

人間は自然に帰ることにより人間本来の姿を取り戻すことができ、そこから強い同情心が生まれ、現代男性の性に対する恐怖はなくなるだろうと主張している。

また、彼は生活の道具を自らの手で作り出した原始時代について強い憧憬を抱いている。

When more men worked in the fields and when most of the goods we need to cover our nakedness against the cold, the houses we live in, were made by men's hands, men were different. ㊦

男性の権威が失なわれたのは、物を自らの手で作り出さなくなった現代からであり、原始時代においては、物を作り出す材料となる石、鉄、木などと直接手で触れることにより、愛着を感じることができたと主張するのである。それらの材料は周囲の自然より直接とり出したものであり、ここに彼の自然や原始主義への強い憧憬が認められる。それらへの回帰は現代において疎外されている男女関係を正常なものにし、抑圧された性を回復するための手段であると彼は考えていた。何物にも束縛されず自然に二人が触れ合うことが、最も理想的な男女関係であると考えたのである。

*Windy* の Sam と Sue が honeymoon を過したミシガン湖に注ぐ河の下流の森林地帯における生活は、その意味で Anderson が理想とする生活であったに相違ない。そこは金の追求のために毎日をあくせくと過さなければならない機械文明下に生きる Sam にとって、正に理想郷であり、自然に取り囲まれた別天地であった。母性を欠く女性として描かれている Sue もそこでは生き生きと行動している。文明社会に帰還後の彼らの生活が、Sam の母代りの Mary Underwood の死、Sue の父の自殺、Sue の相次ぐ死産などの暗い影を帯びていることと比較すれば、そこにおける生活は全く作者の理想とするものであったといえる。Anderson は十全な男女関係が成立する最適の場は、自然であると考えていたように思われる。

彼の自然は Sam と Sue の場合のように、機械文明社会において疎外され傷ついた人間を暖く包容し愛情を与えてくれる母性としての自然のように思われる。*Poor White* における Hugh の少年時代の思い出とつながり精神的な母のような安らぎを与えてくれる ミシシッピ河や、*Dark Laughter* の Bruce が妻の Bernice と別れ放浪の旅に出、ボートで下る河などにおいて上述のような自然観が見られるのである。

このような自然と人間を連結するのは彼が度々言及する hands であるように思われる。hands は彼の作品において、様々なイメージで使用されているが、その中に共通要素を見出すことができる。例えば、*Winesburg Ohio* の *Hands* の中で使用されている Biddlebaum の手は彼の生徒への愛を示すために身体をなでまわす愛撫の手であり、いちごをすばやくつみとる熟練した手であ

る。また、*Dark Laughter* で自然な生き方を楽しむ Sponge Martin の手は、工場においてペンキのはけを持つ手である。彼はすばやく愛撫するかのようにペンキを塗り終えるのである。*Perhaps Women* における手は、原始時代の人間が物を造り出す際にその材料を愛撫した手である。ここで共通に認められる hands のイメージは愛撫の手であり、根底においては自然とつながりを持つように思われる。更に *Story* において Anderson が述べているように、子供達のひび割れた手に油をすりこんでくれる物言わぬ母の愛撫の手を想起し、前述のような彼の母性的な自然を考える時、そこに彼の母の影響を認めざるを得ないのである。

以上のように彼の自然は母性につながり、母性はまた彼の母とつながりを持つものであった。それは女性に対してある種の恐怖に似た無限の神秘感を彼に与えた。女性は mystery であるという感情は晩年まで変ることなく更に高められていったように思われる。ここに機械文明社会において打ちひしがれた男性を導き包容する女性優位の思想が現れることが可能になるのである。

彼は *Perhaps Women* において女性の優位を認め、男性に代る社会的指導権を女性に与えようとしている。

... it seems to me that the new leaders must be women. Because... the woman, at her best, is and will remain a being untouched by the machine. It may, if she becomes a machine operator, tire her physically but it cannot paralyze or make impotent her spirit. She remains, as she will remain, a being with a hidden inner life. ㊦

ここには女性は機械に肉体的に影響されたとしても、精神的には不能になることはないという彼の女性に対する理想論が述べられている。更に女性を隠れた内的生活を営む存在であるとしてその神秘性をたたえている。しかし真に女性は文明社会の影響を受けることなしに、彼の言う内的生活を営むことができるのかという疑問が起るのである。*Perhaps Women* において、彼が訪れた織物工場には多くの女工が雇用され、男子と同様に労働していた。彼がその女工達に機械に影響されぬ活潑さを見たとしても、それは彼が少年時代に見た母の大家族を支えた女性としての強さ、たくましさと同種の幻影ではなかったかと想像されるのである。

Ⅱにおいて彼の作中人物には生活の具体性がないことを述べたが、ここでも女性がいかにして文明社会において指導的立場をとり、男性を救済するのかという点では具体性を欠き、抽象的女性像を描いたにすぎなかったよ

うに思われる。重要なことは何故彼がこのような女性優位の、男性を救済するものとしての女性観を持たなければならなかったかということであろう。そこには彼の母の大きな影響を認めることができるように思われる。1において述べたように彼の母は人生を洞察する目を彼に与えたばかりでなく、女性観形成にあって正に大きな存在だったといえる。

彼の個人的事実より女性優位の思想を探っていくと、彼は生涯において4度の結婚をしているが、その夫人のいずれもが知的水準においては彼より高かったことに気付く。最初の夫人、Cornelia Lane からは彼女の文芸に対する関心が高かったこともあって、かなりの教養面の指導を受けたように想像される。2番目、3番目の夫人は元教師であり、特に4番目の夫人 Eleanor Copenhaver は進歩的インテリ女性であり、彼の作品が1930年以降、急速に社会主義的色彩を帯びていったのは彼女の影響によるものと思われる。一方、彼は23才の時に Highschool 教育を終了したのみであり、妻達の影響もまた大きかったに相違ないのである。そして彼は彼自身に影響を及ぼすような女性しか選択しなかったのである。そこにも又彼の女性優位の思想が生まれる素地があったように思われる。

以上述べてきたように Anderson の女性観は母に強い影響をうけ、その影響は彼の文学作品ばかりでなく、彼の私生活にまで及んでいるように思われる。また彼の女性観は母性としてこの女性、男性救済としての女性から女性優位の、社会を指導するものとしての女性観まで高められた点に特徴が認められる。Anderson の描いた愛の世界は、その素朴さ故に、性意識のみが先行して、愛や性の引き起す複雑に錯綜した世界を表すことができなかったが、性は不潔なものであり、人間の肉体は出産のみに使われべきであるとするピューリタニズムの思想を打破するには大いに効果があった。

スザンヌ、リラールはその著書「愛の思想」において現代科学社会における愛の復権を主張し、「この新しいカップルの生活においては、女性が決定的な役割を演ずるだろう。そうするのが女性自身のためでもあるし、第一、女性が加わらなければ何もならない。われわれは新しい時代、女性のものの考え方—他のことについても同様だが、とりわけ愛についての—が優位に立つ新しい時代の黎明にある。」<sup>29</sup>と述べているが Anderson は1920年代においてすでに機械文明社会における愛の危機を問題意識の中にとらえ、終始カップルズの危機を主張し、将来の愛の世界における女性の優位を予言した点にその現代的意義が認められる。

## 註

- (1) Sherwood Anderson, Winesburg, Ohio (The Viking Press, 1919)
- (2) Sherwood Anderson, A Story Teller's Story (The Press of Case western Reserve University, 1968) 以下、本文では Story とする
- (3) Sherwood Anderson, Tar : A Midwest Childhood, (The Press of Case Western Reserve University, 1969) 以下、本文では Tar とする
- (4) Sherwood Anderson, Windy McPherson's Son (The University of Chicago Press, 1965) 以下本文では Windy とする
- (5) A Story Teller's Story, P.93
- (6) Ibid. P.8
- (7) Ibid. P.63
- (8) Tar : A Midwest Childhood, P.107
- (9) A Story Teller's Story, P.9
- (10) Sherwood Anderson, Poor White (The Viking Press, 1971) P.293
- (11) Windy McPherson's Son, P.164
- (12) A Story Teller's Story, P.162
- (13) Poor White, P.37
- (14) Ibid. P.259
- (15) Ibid. P.263
- (16) Ibid. P.360
- (17) Irving Howe, Sherwood Anderson (Stanford University Press, 1966) P.195
- (18) Sherwood Anderson, Dark Laughter (Liveright 1970) P.200
- (19) Ibid. P.201
- (20) Ibid. P.257
- (21) Ibid. P.316
- (22) Ray Lewis White, The Achievement of Sherwood Anderson, (The University of North Carolina Press, 1966) P.217
- (23) Dark Laughter, P.310
- (24) Sherwood Anderson, Perhaps Women (Paul P. Appel) P.57
- (25) Ibid. P.56
- (26) Ibid. P.57
- (27) Ibid. P.43
- (28) Ibid. P.140
- (29) スザンヌ・リラール「愛の思想」岸田秀訳 P.362